

国内外で約3万7000人が挑戦

前回は約1300人上回る

=平成30年度第2回日本語検定=



日本語の総合的な能力を測る「日本語検定」（略称・語検、文部科学省後援事業）の平成30年度第2回（通算第24回）検定試験が11月9、10日に行われました。国内は47都道府県83カ所の一般会場と、学校や会社の施設を利用した656カ所の準会場で、海外はアイルランド（2カ所）、米国（同）、フランス、ドイツ、韓国の5カ国7カ所で実施。国内外を合わせた総受検者数は、前回（今年6月）より1334人多い3万7409人に上りました。

「語検」は、「敬語」「文法」「語彙（ごい）」「言葉の意味」「表記」「漢字」の6つの領域にわたり、日本語を正しく使えるかどうかを測るものです。難易度に応じて1級から7級に分かれており、幅広い年齢層がそれぞれの級の認定の取得に挑戦できます。

今回の級別受検者数は、1級（社会人上級レベル）631人、2級（大学卒業～社会人中級レベル）3988人、3級（高校卒業～社会人基礎レベル）1万5360人、4級（中学校卒業レベル）7452人、5級（小学校卒業レベル）4378人、6級（小学校4年修了レベル）2779人、7級（小学校2年修了レベル）2821人。前回の受検者数が多かった3級と7級は若干減少しましたが、ほかの級はいずれも増加し、特に5級と6級は2倍を超える伸びを示しました。

また、7級の受検者数は前々回（昨年11月）まで750～1500人程度で推移していましたが、前回は3436人へと一気に増えました。その要因として外国人留学生の受検者増が指摘されており、日本で就職を目指す外国人留学生が日本で使える日本語を習得するために受検しているようです。今回も、減ったとはいえ3000人近くが受検しており、当面はこうした傾向が続きそうです。

今回の受検者のうち、最年長は92歳の女性で、2級を受検。最年少は保育園に通う5歳の女の子で、7級を受検しました。

◆ 東京会場では537人が受検

東京会場となった上智大学四谷キャンパス（千代田区紀尾井町）では、1級から7級まで計537人が午前と午後に分かれて受検しました。この日の都内は、雨模様で肌寒かった前日の天気から一転、秋晴れが広がって季節外れの暖かさとなりました。

午前の部のスタートは11時。筆者が検定会場となる校舎に着いた10時ごろには、ロビーや教室内に多くの受検者が到着していて、黙々と問題集を読み返している姿が見られました。静かな緊張感が漂い、時間がたつにつれてピリピリした雰囲気になっていきました。

午前の部が始まる前と終わった後に、受検者から話を聞きました。



◆「会社で昇進するために」

食品関係の会社に勤める男性（33歳）は今回が3回目の受検で、3級から2級への昇級を目指していました。男性の会社では、日本語検定をはじめとして、資格の取得を昇進の判断に取り入れているといいます。男性は、2級の取得が「会社で昇進するのに必要」といい、緊張した面持ちで教室に入ってきました。

◆「敬語や文法を学ぶために」

4級の教室前で母親と話していた中学1年生の男子は、今年6月に5級に合格し、この半年で早くも4級にチャレンジ。「敬語とか文法を学びたくて」と、学校とは関係なく自分の意思で検定に挑んでおり、「中3までにはぜひ2級を取りたい」と目を輝かせていました。



◆「趣味で挑戦」

この中学生と同じ教室では、外国人の青年も受検していました。終了後に話を聞くと、スウェーデンから来ている27歳の会社員で、日本に住んでほぼ5年になるとのことでした。「語検」への挑戦は「個人的な趣味で」といい、午前の4級と午後の3級のダブル受検。高校生と大学生のときにも日本への留学経験があり、4級の問題については「特に難しくなかった。満点というわけにはいかないでしょうけど」と笑顔で語ってくれました。

◆「日本語が勉強の材料に」

検定が終わって6級の教室から出てきた小学生の女子2人は、「どうだった」の問い掛けに、声をそろえて「難しかった」。付き添いの父親に話を聞くと、2人は双子で小学3年生でした。自身も1級を持つという父親は「敬語とか漢字とか、勉強の材料になる。小学生にとっては総合的に学ぶことができる」と子どもに受検させるメリットを強調し、「年に1回受けて小学校卒業までに3級を取れば」と期待を膨らませていました。

(時事通信社編集委員 近木隆夫)



次回
予定

文部科学省後援事業 **日本語検定**

2019年度 第1回 (通算第25回)

一般会場 **6/8(土)** 準会場 **6/7(金)・6/8(土)**

申込期間 **3/1(金) ~ 5/10(金)**